

# 万葉の川心

横浜市教育委員会  
東部学校教育事務所 指導主事  
澤井園子

遙かに江を訴る船人の唱を聞ける歌一首

(巻第十九 四一五〇番歌)

朝床に 聞けば遙けし

射水川

朝漕ぎしつづ歌ふ船人

溶けきれない雪が、道路の片隅で頑固に冬を主張している。「鬼は外」「福は内」の声で季節の分かれ目なのだと思ひに言い聞かせるが、コートの上にマフラーと手袋で完全防備をしても芯から冷える。冬を越えていくのは、年齢を重ねるとともにしんどくなっていく。寒さは試練と重なって、身体と心のバイオリズムも低くなる。以前に、「日本人は落ちていく時にはあまりジタバタせず、底まで来たと感じると上がっていく」と分析した話を耳にしたことがある。あまり何かでくくって考えるのは好まないが、少し分かる気がした。今ある試練が終わりのないトンネルのように感じる。出口などない気がする。考えを巡らすのが為す術もない……。そんな時は、敢えて出ようとするとするよりも、終わりが来ることを実感できるまで、厳しい寒さの中に留まろうとする。なぜだろう。春が来ることをどこかで信じているからだろうか。それとも、自分には「ここから抜け出る力」があることに気付かせてくれる、「何か」に会えることを、じつと待っているのだろうか。

射水川は現在の小矢部川のこと、当時越中国庁はこの川の河口にほど近い高台にあったと考えられている。大伴家持は、三十一歳で越中に赴き、五年間、単身で国守を務めている。時は旧暦の三月、夢から覚めたその頃か、

朝の床で遠くから歌が聞こえてくる。それは遙かな射水川の景色をも彷彿とさせ、そこに浮かぶ船、そして、漕ぎつづ歌うその人々に想いが向かう。ぬばたまの夜に聞いていた悲しげな雉の声や、心しおれそうな川千鳥の声に、妻を想い、都を懐かしみ、そうした夜を重ねて迎えた朝。また陽は昇り、ひとり目覚める。布団のぬくもりとともに、歌に包まれ、心が今日の準備を始める。誰と出会い、何が待っているのかは分からない。朝の光が不安の闇を少しずつ塗り替えていく。船人の力強く漕ぎ出す様が歌と重なり、響きとともに朝の床へやってくる。「朝の寝床で聞いていると、遠くから歌が聞こえてくる。射水川で、朝船を漕ぎつづ歌っている船頭よ。」歌碑は、富山県高岡市を流れる小矢部川にかかる米島大橋の欄干にある。

一步踏み出すか・・・そんな声が聞こえてきた。歌はいつでもそばにいて、人を包み、勇気を、涙を、力をくれる。川も同じかもしれない。もう少し、このまま歌を聴いてみよう。この歌が終わったら布団を出ようと、自分を励ます冬の日の朝であった。



富山県高岡市米島大橋